氏　　名	黄 昱
学位（専攻分野）	博士（文学）
学 位 記 番 号	総研大甲第 1814 号
学位授与の日付	平成28年3月24日
学位授与の要件	文化科学研究科　日本文学研究専攻 学位規則第6条第1項該当
学 位 論 文 題 目	『徒然草』の漢籍受容と漢訳・継承
論 文 審 査 委 員	主　査　　准教授　海野　圭介 准教授　相田　満 准教授　小山　順子 教授　堀　誠　早稲田大学 准教授　近本　謙介　筑波大学

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

鎌倉時代に兼好法師によって著された『徒然草』は、和文脈で書かれた随想的文章ではあるが、中に『文選』『白氏文集』といった漢籍の書名が見え、その文章表現が引用されるとともに、記される感情や思想などにも漢籍からの影響が指摘されている。作者の兼好法師が「ひとり、灯のもとに」（13 段）親しんだ書籍の中、つまり、兼好法師の教養の基盤に漢籍があったことは、江戸時代に多く著された『徒然草』の古注釈書にも指摘されており、出典分析の作業は近代以降も継続されてきた。『徒然草』の文章表現の拠って立つ出典を求めることは、『徒然草』の表現意図を考えるための基礎的作業として重要なのは言うまでもない。しかし、従来行われてきた典拠の指摘や受容方法の分類だけでは『徒然草』における漢籍受容の意図や効果、また作者である兼好法師の知的基盤を探るのには不十分であり、漢籍との影響関係が認められる箇所についてより詳細に考察を行う必要がある。本論文は漢籍と『徒然草』の関係について再検討を行い、出典となる漢籍が舶載されてから日本における受容の形態とその過程における意味と使われ方が変容する様態をも視野に入れ、『徒然草』に先行する作品の受容とその表現効果を分析することで、『徒然草』という書物の内部世界の解明を試みた。

江戸時代には注釈で『徒然草』の出典となる漢籍が多く指摘されるとともに、『徒然草』自体を漢訳し、それを他の漢籍を含むアンソロジーの中に据えた選集も現れる。これは『徒然草』をして日本の『論語』（藤井懶斎『徒然草摘議』）と言わしめたほどに漢籍的な有用性が認められていたことにほかならない。本論文では、そうした『徒然草』の漢訳を収める書物の中で重要な一群をなす異種『蒙求』（唐時代に成立し、漢学啓蒙書として大きな影響力のあった『蒙求』の意匠に倣った作品群）を対象に江戸期以降の『徒然草』受容の重要な形態のひとつ「漢訳」の問題を考えた。

本論文は上記の課題を三部八章にて考えた。

第一部は『徒然草』が受容した漢籍の問題を論じた。まず第一章は、表現と思想の両面で『徒然草』に多大な影響を与えた『白氏文集』を取り上げ、『徒然草』が漢籍を受容する際の方法を分析した。『徒然草』は『白氏文集』そのものを直接に受容するだけでなく、『千載佳句』『和漢朗詠集』等の平安時代の秀句撰、『源氏物語』『枕草子』等の王朝文学、「文集百首」等の和歌を通して間接的・重層的に『白氏文集』を理解している。すなわち、原典『白氏文集』にとどまらず、『徒然草』に先行してそれを受容した古典作品の中で変容し日本化した表現や理解を踏まえているのである。本章では『徒然草』が漢籍や、漢詩文表現を日本化したもの等を重層的に享受した様相を中心に論じた。

第二章は、第 25 段を例にその重層的な漢籍受容の具体例を取りあげ、「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」、旧邸懐旧のテーマを語る際に用いられた文章について論じた。『史記』李将軍伝を出典とする故事「桃李不言」によるが、「徳のある人には自然に人が心服する」という原典の意味から離れて、中国・日本の漢詩文、さらには和歌においても懐旧の思いが詠まれたことを明らかにした。『徒然草』に到るまでの「桃李不言」の理解の変遷を述べることによって、『徒然草』がそうした変容した理解を取り入れていることを指摘した。

第三章は、第13段に描かれる「灯下読書」の場面を考察した。『徒然草』の作者の兼好法師の肖像画のほとんどは灯のもとで読書する姿で描かれている。本章は、その姿が和文

の古典作品に見られる「灯のもと」の類型ではなく、漢詩に詠まれた「灯下読書」から影響を受けたことを指摘した。

以上、和漢の古典作品という中間的媒体を経由し漢籍を受容した『徒然草』の方法と表現効果とについて考察したのが第一部である。

第二部は、漢文に翻訳されて受容される『徒然草』という観点で、異種『蒙求』作品群に含まれる『徒然草』の問題を考えた。江戸時代から近代に至るまで多く出版され続けた異種『蒙求』において、『徒然草』の漢訳が取り入れられてきたが、その採択された『徒然草』の内容には年代的変遷が認められる。第一章ではそのターニングポイントとなる安政五年（1858）刊『皇朝蒙求』までを対象に『徒然草』の漢訳方法を分析した。『皇朝蒙求』以前に刊行された異種『蒙求』には主として奇話が選択されることが多く、文章においても独自の訳文が多い。『徒然草』に取材した話も後代のものよりも多い。十七世紀は『徒然草』自体の注釈書が多く作成されるようになり、本書の思想的側面への関心も高かったが、その後に啓蒙書である異種『蒙求』に『徒然草』の多くの逸話が取り込まれるようになったと考えられるのである。

第二章は、『皇朝蒙求』以降の幕末・明治期にかけて作られた異種『蒙求』を分析した。この時期の異種『蒙求』に漢訳される『徒然草』の部分は『大日本史』や先行異種『蒙求』からの再引用が多く、内容も松下禅尼（184段）と北条時頼（215段）の倹約の美徳、及び兼好法師の読書・尚友の美徳の話だけに集中する。この時期の異種『蒙求』は『徒然草』に由来するものも一話二話程度に激減し、内容も教訓色の強いものに限定されるようになる。

第三章は、異種『蒙求』の標題となる人物の対偶を考えた。異種『蒙求』は原典『蒙求』にならい人名二文字と事跡二文字の四文字を対にした八文字の成句（韻文）で標題が記されるが、その組み合わせには、江戸時代に作られた兼好の伝記に見える人物像が影響を与えている。江戸時代の兼好伝には、世を逃れた隠遁者である兼好、南朝と深い関わりを持つ兼好、好色法師である兼好、という現在の兼好法師とは隔たった兼好像が描かれ、異種『蒙求』の対句もこのイメージを背景に構成されているといえる。

以上、第二部は、啓蒙的書物である異種『蒙求』の中に『徒然草』を出典とする逸話が引用され、その説く思想や教訓が受容されることを新たに指摘し、漢訳された上で受容されるという、従来あまり注目されなかった『徒然草』の受容の様態とその意義を明らかにした。

第三部は、中華民国時代以降、『徒然草』が中国語に翻訳される過程を辿った。近現代中国語訳と第二部で検討した日本における漢訳とを比較することを通して、それぞれの特質を分析し、古典のみではなく、現代の問題にも視野を広げて本書の漢籍的な性格を考えた。

以上、本論文は受容と影響という二つの視点から『徒然草』と漢籍との関係について考えたものである。『徒然草』は、漢籍由来の知識を原典から受容するとともに先行する古典文学作品の中で日本化された表現をも重層的に受容している。こうした漢籍受容を通して獲得した一種の准漢籍的な地位を背景に江戸時代には漢訳されて享受される事例のあったことを論じた。そうした享受の方法を考える際に重要な作品群であった異種『蒙求』の歴史的変遷とその内容について考察することを通して、三部を併せて、漢から和へ、和から漢へという「和」と「漢」の往還を通して権威化される『徒然草』という書物の古典としての性格の一端を明らかにした。

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

博士論文の審査結果の要旨
Summary of the results of the doctoral thesis screening

黄昱氏の博士学位請求論文『『徒然草』の漢籍受容と漢訳・継承』（以下「本論文」と称す）は、その表現や思想に漢籍からの多大な影響が指摘されてきた『徒然草』をめぐって、その形成過程における漢籍に由来する成句や概念・知識の享受の問題と、『徒然草』が読み継がれ受容されてゆく過程において試みられた注目すべき形態である漢訳（漢文化）を通した享受の実態解明とその意義について 3 部に亘って分析した論考である。

第一部では、典拠となる漢籍由来の表現が和文脈に取り入れられてゆく過程とその方法が関連資料の緻密な比較を通して検討される。第一章では『徒然草』と『白氏文集』の関係が検討される。『徒然草』における『白氏文集』の影響が、原典そのものよりも同書の日本における長い受容の歴史を経て定着した表現や知識を通したものであることが、多くの和歌や散文の例を示して述べられる。第二章の「桃李不言」の故事の受容についての考察は、『史記』に典拠の求められる表現の中国・日本における受容を伝える資料が博捜され、その原典の伝える内容が中国・日本における受容の過程で変容してゆく様相が辿られる。『徒然草』の記述は日本撰述の秀歌撰である『和漢朗詠集』の古注釈書、覚一本『平家物語』などの日本中世に行われた理解に近いことを指摘しつつも、それらの表現自体が中国における「桃李不言」の成句の理解の変容の影響を受けていることをも示し、中国・日本における漢籍由来の知識の伝承過程に関する新たな知見を示している。第三章の「灯下読書」的文辞の受容をめぐる考察は、第一・二章とは逆に、『徒然草』第十三段をもとに定着する「灯のもとで読書する」作者・兼好の姿の造形が、日本の文学作品に見える「灯のもと」の表現類型ではなく、漢籍由来の「灯下読書」の表現類型の影響下にあることを述べ、併せて宋代文学の受容の可能性を指摘する。

これらの指摘と考察は、『徒然草』の背景にある知的環境を明らかにする新見であるのみならず、中国に発する知識と表現が日本に伝わり、文学的表現を形成する学的基盤となってゆく過程を具体的に描き出したものとしても評価される。

第二部は、江戸時代から近代初頭における「蒙求」（唐代成立の幼童教育用の教学書。漢籍由来の知識の習得のための暗唱テキストとして日本においても広く用いられた）の名を冠した啓蒙書（以下「異種「蒙求」」と称す）に漢訳されて収められ受容された『徒然草』の実態の解明とその意義をめぐる問題を扱う。

第一章では、現在までに 62 種類の刊行が確認されている異種「蒙求」を調査し、『徒然草』の引用が確認される 11 種類のうち、『桑華蒙求』（宝永 7 年（1710）序）から『皇朝蒙求』（安政 5 年（1858）刊）までの 6 種類を対象として、その『徒然草』受容の方法と特質が探られる。後発する異種「蒙求」に大きな影響を与えた『桑華蒙求』が『徒然草』の古注釈を参照しつつ編纂されたことの指摘は、江戸時代の『徒然草』享受史における注釈と漢訳の連動を考える上で重要である。また、漢訳された上で読まれるという享受方法の背景に、『徒然草』が漢故事のエッセンスや老荘思想を記す書として認識されていたことなど、近年の『徒然草』研究が明らかにしてきた江戸時代初頭における『徒然草』の読まれ方が影響していることを指摘し、漢籍由来の知識と逸話を多く記し、思想文献としても読み継がれた背景を持つ『徒然草』が、漢籍的なイメージをまとい、ついには本文が漢訳され「蒙求」の名を冠した諸書に引用され読まれるようになったとする。第二章では『大和蒙求』以後明治時代初頭頃までに刊行された 5 種類を対象として、その特質を明らかにする。『皇朝蒙求』以前に刊行された異種「蒙求」に、江戸時代の儒者・服部南郭（1683-1759）によ

る日本の逸話、言行の筆録である『大東世語』を参考とする例が認められるのに対し、『大和蒙求』以後に刊行された異種「蒙求」には『大日本史』の影響が強いことを指摘し、『徒然草』原典からの直接の漢訳ではなく、当時流布した諸書から引用されることが多くなり、内容も教訓的色彩の強いものに絞られてゆくことを指摘する。第三章では、異種「蒙求」の文章構成に、江戸時代に刊行された兼好法師の仮構の伝記類の描く、南朝の人物としての兼好、諸国を回国する僧としての兼好、好色法師としての兼好などの現在の兼好法師に対する理解とはかけ離れた人物像が反映していることについて述べる。

第二部は、漢訳を通した受容という従来顧みられることの少なかった『徒然草』享受の存在形態を明らかにしたこと自体、この作品の受容の歴史に新たな光を当てるものだが、異種「蒙求」諸本の博捜とその特質の解明、及び関係性の精査は『徒然草』漢訳史の基礎的資料整理としても労作と言える。また、漢訳という形で享受された『徒然草』受容のあり方を、総体として広く江戸時代社会における思想運動や文学創作との連動から定位した視点と方法は評価される。

第三部は、中国近代の作家である周作人（1885-1967)、郁達夫（1896-1945）による『徒然草』の中国語訳を取り上げる第一章とその本文について述べる付章からなる。それぞれの漢訳において行われた章段選択の傾向などの分析から、『徒然草』に求められたものを読み取ってゆく視点は、日本の江戸期に行われた啓蒙的受容の例を分析した第二部と併せ読むことで、『徒然草』という作品への視線のあり方の歴史性・地域性などを改めて考えさせられる興味深い視点の提示と分析であると言える。また、周作人は『徒然草』に趣味性を見出し、郁達夫はそれに思想性を読み取るという指摘とともに、翻訳の成果が周作人のその後の創作活動に影響を与えたという指摘は、異文化理解の手段としての翻訳と文学創造の関係を考える上でも示唆に富む。

近年の漢籍に由来する知識や表現の受容に関する研究は、漢土由来の知識や表現が日本へ伝来し多大な影響を与えつつ、それ自体は次第に和様化していったというような素朴な理解への批判を含み、中国に発する知識や思考が咀嚼され再構築されて日本的表現や方法となる一方で、漢土由来としての痕跡を留めることにおいて多大な意義を有することをも念頭におき、漢と和の間で往還する文化受容のあり方を書籍の記述に辿り、その理解の逐一の意味を解明することに目的があった。本論文はそうした視点を継承し、漢文脈とその知識、和文脈とその表現が相互に混交しつつ形成される『徒然草』の文章の分析とその生成に関する検討、『徒然草』を介した知識と表現の流動の様相を描き出しているといえる。第一部で論じられる、『徒然草』という作品に至る漢籍由来の知識の日本的展開を辿る手法は、古典的ながらも新資料の提示を含む手堅い分析であり、第二・三部で論じられた『徒然草』という作品の読み継がれた歴史の新たな一面の発掘と当時の出版や編纂事情との関係の探求は、『徒然草』という作品が担ってきた社会的役割や意義を明らかにするものであり、一作品の作品研究としてのみならず、歴史社会の中で絶えず評価され、再定義、再構築されつつ読み継がれてゆく作品の社会性をも描き出すものとして高く評価できる。

しかしながら、本論文にも課題が無いわけではない。漢籍由来の知識の受容に関する問題は、広く東アジア地域における知識の往還とローカライズをテーマとして日本国内のみならず中国・欧米の研究者によっても近年盛んに検討が行われている分野である。本論文においても、それらの成果と接続することによって、本論文がそうした研究のどこに位置づけられるのかという広い視角が欲しいように思われる。また、第二部についても、異種「蒙求」類の成立を江戸時代の儒者たちの活動一般の中において考える必要性があり、『大東世語』や『大日本史』の編纂とそれらの書が江戸時代社会に与えたインパクトの問題な

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)
ど、対象とする作品の外側の実態社会とその歴史へのさらなる目配りも必要であろう。だが、これらの課題は本論文の成果の上に積み上げるべき課題とも言え、本論文の達成を否定するものではない。よって、本論文は博士学位に相応しい内容を備えるものと評価される。